

金沢学院大学・金沢学院短期大学

二〇二二(令和四)年度 入学者選抜試験問題

一般選抜Ⅰ期〈二日目〉

二〇二二年二月五日(土)実施

国語

Ⅰ 注意事項

解答用紙に「国語」と記入・マークしてから解答してください。

問題は1ページから16ページまであります。

第3問、第4問は受験する学科・専攻によって解答する設問が異なりますので、注意してください。

問題は持ち帰ってもよいですが、コピーして配布・使用するのには法律で禁じられています。

Ⅱ 解答上の注意

解答用紙は、マーク式解答用紙と記述式解答用紙の2種類があります。

マーク式の問題で、「解答はマーク式解答用紙 10」と表示のある問いに対して④と解答する場合は、下記の

例のようにマークしてください。記述式の問題には「解答は 記述式解答用紙」と表示がありますので、記述式の

解答用紙に記入してください。

(例)

解答番号	解 答 欄
10	① ② ③ ● ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

問題は次のページからです。

第1問 次の文章を読んで、後の問い(問1～7)に答えよ。

小説の「礼儀作法」ということが最近気になっている。たとえば手紙のように読み手が限定される文章では、出だしても明確に「作法」が意識される。「こんにちは！」なのか、「ごぶさたしています」なのか、「桜の便りが次々に聞かれるこの折」なのか、親しさの度合いによってこちらの態度も決まる。では、小説ではどうか。そもそも小説は誰が読むのかわからないものだ。書いてある内容も文字通りフィクション。作法など意識しようがなさそうに見える。①「ヨセンすべては「嘘」なのだ。しかし、虚構の世界であればこそ、「礼儀作法」がより大事になってくる、というのが私の考えである。このことについて簡単に説明してみたい。

「安心型社会」と「信頼型社会」という分類がある。心理学者の山岸俊男は「安心」と「信頼」という区別を立て、仲間内での価値観の共有などからもたらされるのが「安心」、仲間うちを超えた他者一般や人間一般に対するのが「信頼」だとしている。この区別を基準にすると、社会にも二つの潮流が見て取れるのがわかる。まず一方にあるのは、どちらかというと既存の社会的安定感や価値の共有に頼る、いわば「安心型」の社会。他方には、安定感があまりなく価値も共有されていない、つまり、いちいち誰を信頼するのか個別に判断しなければならない「信頼型」の社会。前者の②「テンケイ」は、たとえば日本。後者はアメリカである。

この安心型と信頼型という二分法を言語学者の滝浦真人は敬語にも応用してみせた。私たちは敬語というといきわめて日本的なものだと思いがちだが、近年「ポライトネス」(「配慮」と訳される)という新しい概念が確立され、「敬意の表し方」の③「フヘン」性に注目が集まるようになってきた。どうやら他者と距離の取り方について、人類全体に共通した何かがあるらしい——そんなことがこの概念を通して見えてくる。ただ、それでも日本的な敬意・親しさの表現と、フヘン的に世界中で見られる配慮には若干の違いがある。滝浦はこの違いを「安心型」か「信頼型」かという枠で説明する。

日本的な敬語表現は明確に決まりがある。朝起きたら「おはようございます」。道で会ったら「こんにちは」。まるで A 守られるルール

だ。やらなければ叱られるが、やってさえおけば叱られない。まさに「やっておけば安心」の「安心型」なのである。これに対しそうでない方法がある。決まった形はないが、相手や状況に応じて、たとえば質問や同意によって配慮のジェスチャーを示すというやり方である。後者の場合、明確なルールがないだけに、こちらの提示したものを相手が読み取るかどうかで意図が通じたり通じなかったりする。このように状況に応じてシグナルをやりとりして行われる配慮を滝浦は「ポライトネス型」と呼び、ルール重視の日本的な「敬語型」と区別する。ポライトネス型は、ルールが明確に共有されていない分、不安定である。「これだけやっておけば！」という安心感はない。しかし、文化を共有しない共同体外からの他者も配慮のやり取りに参加できるという利点があ

る。(イ)システムが開かれているのである。

さて、ここからが小説の話だ。近代のヨーロッパで発達した小説というジャンルでは、個人のごくプライベートな体験や事件を多数の読者に向けて暴露、という形がとられた。これは④カッキテキなことだった。近代になって個人の内面やプライバシーといった感覚が生まれたからこそ、それを「暴露」することも可能になったのである。そこに小説的「関心」も生まれた。ただ、はじめから小説が不特定多数の読者に向けて語られたわけではない。一八世紀の小説がしばしば書簡体の語りという形をとったことからわかるように、小説といえども語るためには顔の見える読み手を設定することが多かった。

一九世紀ともなると、⑤「神の視点」と呼ばれる、世界全体を俯瞰するような語り口が主流となってくる。現在では誰かに語りかけるようなスタイルの小説はむしろ少数派だ。しかし、対人関係が見えなくなったとしても、聞き手／受け手の関係は⑥イゼンとして大事である。というのも——他のジャンルの文章と比較してもそうだと思うのだが——小説は作品ごとに大きく異なる「読み方のルール」を読者に提示するからである。背景、設定、人物、文体など、すべてをゼロから構築するのが小説なのである。受け手の柔軟な協力なくしては成り立たない。語り手は、どのような協力が必要かをいちいちシグナルとして示す必要があるし、聞き手／受け手もそれを解釈し消化することではじめて内容が受け取れる。小説を読むという行為の肝は、このようなシグナルのやり取りにあると言っても過言ではない。

こうしてみると、小説の礼儀作法が「とりあえず型を守っておけば安心」という敬語型ではなく、そのたびにジェスチャーを示して相手と交渉するようなポライトネス型なのは明白だろう。これは近代になって、形式重視の定型詩のようなジャンルが廃れていったこととも連動している。近代社会では、見知らぬ他者と交渉する機会が劇的に増え、それだけに各自が決まった形式に寄りかかるとはならず、新しい人間関係に柔軟に対応することを求められてきた。文章も例外ではない。小説はそうした出会いを練習するための装置となってきたのである。

それにしても不思議なのは、⑦私たちにこのような読解の能力が備わっているということである。小説の語り手からの要請を受け入れ、構築に協力することが私たちにはできる。たいしたものだと思う。それを単に想像力と呼ぶだけでは十分でない。コミュニケーションの円滑化や、対人関係の調整ともかわる複雑な心のメカニズムが、小説を読むという作業にはかかわっている。まだまだ私たちが気づいていないことは多い。それだけにおもしろい発見がありうる領域だと思う。

(阿部公彦『病んだ言葉 癒やす言葉 生きる言葉』による。一部改変。)

問1 傍線部①～⑤のカタカナを漢字に改めよ。解答は記述式解答用紙。

- ① ショセン ② テンケイ ③ フヘン ④ カツキテキ ⑤ イゼン

問2 空欄Aに入れるのに最も適当な表現を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答はマーク式解答用紙1。

- ① 起き上がり小法師こぼしのように ② 親の敵のように ③ 金太郎飴あめのように
④ 判で押したように ⑤ 着た切り雀すずめのように

問3 次の語群のうち、傍線部(A)「敬語型」の説明に当たるものはいくつあるか。その数をマークせよ。解答はマーク式解答用紙2。

語群 ・「安心型」である。

- ・柔軟である。
- ・「信頼型」である。
- ・アメリカ的である。
- ・不安定である。
- ・意図が通じないことがある。
- ・明確なルールがある。
- ・シグナルのやりとりをする。
- ・価値が共有されていない。
- ・型が決まっている。

問4 傍線部(イ)「システムが開かれているのである」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答

はマーク式解答用紙3。

- ① 「ポライトネス型」は価値観を共有する必要がないため、他者は型を気にせず、自由自在にやり取りができるということ。
② 「ポライトネス型」は不安定であるため、こちらの意図が通じるかどうかは相手の価値観によって決められるということ。
③ 「ポライトネス型」は明確なルールがないため、価値観を共有しない相手とも配慮を込めた意思疎通ができるということ。
④ 「ポライトネス型」は異なる価値観を持つ他者も自由に配慮ができるうえ、ルールを守らなくても叱られないということ。
⑤ 「ポライトネス型」はルール重視の価値観を持つ人が、ジェスチャーやシグナルによってやり取りに参加するということ。

問5 傍線部(ウ)「神の視点」と呼ばれる、世界全体を俯瞰するような語り口」の小説とは、どのような小説か。□□については本文中から抜き出し、

□□については本文中の語を用いて、次の空欄にあてはまる形で、それぞれ10字以内で書け。解答は記述式解答用紙。

□□に向けて書かれた、□□小説。

問6 傍線部(エ)「私たちにこのような読解の能力が備わっている」とあるが、それはどのような能力か。次の①～⑤のうちから最も適当なものを一つ選べ。解答はマーク式解答用紙□□。

- ① 背景、設定、人物、文体等、小説の世界の全てをゼロから想像する能力。
- ② 語り手からのシグナルを受け入れて、小説の世界を共に作り上げる能力。
- ③ 新しい人間関係に柔軟に対応してコミュニケーションを円滑にする能力。
- ④ 出会いを練習するための装置として小説を読み解き、活用していく能力。
- ⑤ 対人関係の調整に関わる複雑な心のメカニズムを使って、交渉する能力。

問7 二重傍線部に「虚構の世界であればこそ、「礼儀作法」がより大事になってくる、というのが私の考えである」とあるが、この筆者の「考え」について、次のようにまとめたい。次の空欄にあてはまる形で、50字以内で述べよ。解答は記述式解答用紙。

小説だからこそ、□□という礼儀作法が必要だ、と筆者は考えている。

第2問 次の問題を読んで、後の問い(問1〜4)に答えよ。

「私(古倉)」は、三十六歳。大学一年生のときから十八年間、同じコンビニエンスストアでアルバイトとして勤めている。泉さんは「私」より一歳上の三十七歳の主婦でアルバイトリーダーとして信頼されている。菅原さんは二十四歳のアルバイト。最初は遅刻も多かったが、泉さんが上手に叱って教育したおかげで、今ではすっかり真面目になり熱意をもって仕事をしている。

働く前の泉さんは少し派手だが三十代女性らしい服装をしているので、履いている靴の名前やロッカーの中のコートタグを見て参考になっている。一度だけ、バックルームに置きっぱなしになっていたポーチの中を覗き、化粧品の名前とブランドもメモした。それをそのまま真似してはすぐにバレてしまうので、ブランド名で検索し、その服を着ている人がブログで紹介したり、どちらのストールを買おうかな、と名前をあげている他のブランドを着ることにしている。泉さんの服装や持っている小物、髪型などを見ると、それが(ア)正しい三十代女性の手本のように思えてくる。

泉さんが、ふと、私の履いているバレエシューズに目を止める。

「あ、それ、表参道のお店の靴だね。私もその靴、好きなのー。ブーツ持つてるよー」

泉さんは、バックルームでは少し語尾を伸ばしてだるそうに喋る。

こちらの靴は泉さんがトイレに入っている隙に靴底のブランド名をメモして、お店に出向いて買ったものだ。

「えーっ、ほんとですか！ ひよっとして紺色のやつですよね。前にお店に履いてきましたよね、あれ可愛かったです！」

菅原さんの喋り方をトレースし、少し語尾を大人向きに変えた口調で泉さんに答える。菅原さんはスタツカート(注1)のついたような、少し弾んだ喋り方をする。泉さんとは対照的な喋り方だが、二つを織り交ぜながら喋ると不思議とちよūdい。

「古倉さんって私と趣味が合う気がするー。そのバッグもかわいいよねえ」

泉さんが微笑む。泉さんを見本にしているのだから趣味が合うのは当然でもある。周りからは私が年相応のバッグを持ち、失礼でも他人行儀でもないちよūdい距離感の喋り方をする(イ)「人間」に見えているのだろう。

「泉さん、昨日店にいましたー？ ラーメンの在庫、ぐっちゃぐちやなんですけどっ！」

ロッカーのほうで着替えていた菅原さんが大声を出した。泉さんがそちらを振り向いて声をかける。

「いたよー。昼間は大丈夫だったんだけど、夜勤の子が、また無断欠勤だったの。だから新人のダット君(注2)が入っているでしょ」
制服のチャックをあげながらこちらへ来た菅原さんが顔をしかめる。

「えー、またバックレですかあ。今人手不足なのに、信じられない！ だから店、ガタガタなんですわねっ。パック飲料ぜんぜん出てないじゃないですか、朝ピークなのに！」

「そうそう、最悪だよな。店長、やっぱり今週から夜勤にまわるって。今、新人さんしかいないもんね」

「昼勤だって就活で岩木くん抜けるのに！ほんと、困りますよね！辞めるなら辞めるで、前もって言うてくれないと、結局しわ寄せが他のバイトに来るだけじゃないですかー！」

二人が感情豊かに会話をしているのを聞いてると、少し焦りが生まれる。私の身体の中に、怒りという感情はほとんどない。人が減って困ったなあと思うだけだ。私は菅原さんの表情を盗み見て、トレーニングのときにそうしたように、顔の同じ場所の筋肉を動かして喋ってみた。

「えー、またバックレですかあ。今人手不足なのに、信じられないです！」

菅原さんの言葉を繰り返す私に、泉さんが時計と指輪を外しながら笑った。

「はは、古倉さんめっちゃ怒ってる！ そうだよな、ほんとあり得ないよー」

同じことで怒ると、店員の皆がうれしそうな顔を見ると気が付いたのは、アルバイトを始めてすぐのことだった。店長がムカつくとか、夜勤の誰それがサボってるとか、怒りが持ち上がったときに協調すると、不思議な連帯感が生まれて、皆が私の怒りを喜んでくれる。

泉さんと菅原さんの表情を見て、ああ、私は今、上手に「人間」ができているんだ、と安堵どする。この安堵を、コンビニエンスストアという場所で、何度繰り返しただろうか。

泉さんが時計を見て、私たちに声をかけた。

「じゃ、朝礼しようか」

「はい」

三人ならんで整列し、朝礼が始まる。連絡ノートを泉さんが開き、今日の目標と注意事項を伝えた。

「今日は新商品のマンゴーチョコレートパンがおすすめ商品です。皆で声かけていきましょー。それと、クレンリネス(注3)強化期間です。昼の時間は忙しいですが、それでも床、窓、ドア付近はこまめに掃除するようにしましょう。時間がないから誓いの言葉はいいや、それでは、接客用語を唱和します。」

『いらっしやいませー!』

「いらっしやいませー!」

『かしこまりましたー!』

「かしこまりましたー!」

『ありがとうございますー!』

「ありがとうございますー!」

接客用語を唱和し、身だしなみのチェックをして、「いらっしやいませー!」と言いながら、一人ずつドアの外へ出ていく。二人に続いて、私も事務所のドアから飛び出した。

「いらっしやいませ、おはようございますー!」

この瞬間がとても好きだ。(E) 自分の中に、「朝」という時間が運ばれてくる感じがする。

外から人が入ってくるチャイムの音が、教会の鐘の音に聞こえる。ドアをあければ、光の箱が私を待っている。いつも回転し続ける、ゆるぎない正常な世界。私は、この光に満ちた箱の中の世界を信じている。

(村田紗耶香『コンビニ人間』による。)

(注) 1 スタッカート——一音、一音を短く切り離して演奏する方法。

2 ダット君——ベトナム人のアルバイト店員。

3 クレンリネス——店が清潔で衛生的であること。

問1 傍線部(ア)「正しい三十代女性の手本」とはどういうことか。次の①～⑤のうちから最も適当なものを一つ選べ。解答はマーク式解答用紙 5。

- ① 多くの人に三十代の女性として違和感なく受け入れられる格好。
- ② 誰もが憧れる三十代の女性としての完璧な理想としての容姿。
- ③ 現代日本の三十代の女性を代表し象徴するような存在。
- ④ 三十代の女性の目標となる仕事と生活のバランスが取れた生き方。
- ⑤ 三十代女性の中でも都会的で洗練された最先端のファッションセンス。

問2 この文章においては、傍線部(イ)・(ウ)で〈人間〉という語が「」に入れられている。次の文はその理由について述べたものである。空欄にあてはまる語句を20字以上30字以内で書け。解答は記述式解答用紙。

人間として当たり前前に皆がやっていると思われることが、主人公にとっては

だから。

問3 傍線部(エ)「自分の中に、「朝」という時間が運ばれてくる感じがする」とあるが、これを「自分で「朝」が来たことを実感できる」と書かずに、傍線部(エ)のように書くことでのようなことが表現できるのか。次の空欄A、Bにあてはまる語句として最も適当なものを、次の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答はマーク式解答用紙、A 6、B 7。

「私」にとって「朝」は、Aに実感するものではなく、コンビニエンスストアによってBものだということ。

空欄 A

- ① 時間的
- ② 論理的
- ③ 主体的
- ④ 恒常的
- ⑤ 個人的

空欄 B

- ① 一般化される
- ② あつかわれる
- ③ 視覚化される
- ④ もたらされる
- ⑤ ゆがめられる

問4 「私」にとってコンビニエンスストアとは、どのような場所なのか。次の①～⑤のうちから最も適当なものを一つ選べ。

解答はマーク式解答用紙 8。

- ① 社会と自分とのずれを意識することなく、マニュアルに従って周りの人々とも違和感なく生き活きと活動できる場所。
- ② 気心の知れた仲間とチームとして共通の目標を目指すなかで、自らの成長と人と人の絆きずなが実感できる場所。
- ③ 経済的な合理性のみを追求した、人間的な感情が入り込む余地のない、無機質で非情な自分になれる場所。
- ④ どんな人間も差別することなく受け入れてくれる、平等と自由が保たれた中で心から安らぐことができる場所。
- ⑤ 自然から切り離され雑多なものが入って来ない、常に明るく清潔に保たれた都会的な感覚を味わうことができる場所。

第3問、第4問は受験する学科・専攻によって解答する設問が異なりますので、注意してください。

【大学】 文学科（英米文学専攻・心理学専攻）

教育学科

経済学科

経営学科

経済情報学科

芸術学科

スポーツ科学科

栄養学科

【短大】 現代教養学科

食物栄養学科

幼児教育学科

上記学科・専攻の受験者は、第3問を解答しなさい。

（11ページ～13ページ）

【大学】 文学科（日本文学専攻・歴史学専攻）の受験者は、第4問【古文】を解答しなさい。

（14ページ～16ページ）

第3問 次の文章を読んで、後の問い(問1、2)に答えよ。なお、本文中の漢字表記は原文通りである。

演劇や文学がその根底に一種の「狂気」をはらんでおり、それによって慣習的な日常性を脱出する行為だ、とする説は広く知られている。とくに近年、文化人類学者が芸術を祭祀との関係において研究するようになってから、この考え方は芸術の機能を説明するうえで有力なものになっている。

ひと言でいえば、それは人間の文化を自然そのものの生理になぞらえて、狂気と日常性の循環で文化を説明する仮説だといえる。自然のなかに定期的な混乱と復原があり、生と死が周期的に循環しているように、人間の社会にも秩序の破壊とその回復という生理的なサイクルがある。祭祀というものは、いわば文化の中に組み込まれた「狂気」であり、そこで一日を狂って過ごすことによって社会は生命力を賦活される。ひと粒の種が死ぬことによって植物の生命が維持されるように、人間社会も祭の混乱によってかえってより高い秩序が保たれる。そして、演劇はこの祭のなから直接に生まれて来た芸術であり、祭としての要素を内部にもっともよく残している芸術だといえる。なに者かに扮して歌ったり踊ったりし、憑かれたように他人の人生を演じて見せるのは、その明らかな名残りであろう。内容の如何を問わず演劇することそれ自体が、祭のなかの呪術的なエクスタシーを今日に伝えるものだというのが、この理論の骨子である。

おそらくこの考え方は大筋において正しいのであるが、すべての発生的な説明と同様に、そこには危険な一面もある。すなわち、演劇と祭祀の共通性を指摘する点では正しいとしても、芸術としての演劇を祭祀から区別する側面が見落とされる恐れがあるからである。演劇は祭祀から生まれたとしても、生まれてしまった演劇は祭祀そのものではあるまい。そしてこの問題を考える場合に、世阿彌が能のなかの「狂気」をどのように理解していたかを知ること、よい参考になるであろう。いうまでもなく、能は祭祀のなから生まれて来たばかりの演劇であり、しかも内容のうえで、さまざまな「物狂い」を重要な主題とする演劇であった。一見、能という芸術は、文化的な「狂気」をもっともあらわな形で示す原型のようにみえるのである。

だが、実際に世阿彌の演劇論を読んでみると、彼が能のなかの「狂気」をきわめて技術論的にしか見ていなかったと思われる形跡がある。『拾玉得花』のなかに狂人を舞台にのせる意味がはつきりと語られているが、それは要するに舞台効果の華やかさを技術的に増すということのほかにはない。しとやかで目を忍ぶ女を狂わせることによって、その舞や歌に現実にはあり得ない色香をそえることが目的とされている。さらに彼の劇作論というべき『三道』を読んでも、いわゆる物の怪や憑きものは、高貴で優雅な女性に一層の華麗さを加える手段と考えられているにすぎない。「狂気」そのものに表現上の意味が認められているわけではなく、むしろ、ある種の「狂気」は能にふさわしくないものとしてしりぞけられている。『風姿花伝』によれば、女に修羅の悪霊や鬼神が憑いたり、また男に女の悪霊が憑いたりして狂うことは、「せぬが秘事」として禁じられているのである。

世阿彌にとって能の本質は「舞歌二曲」にあり、したがって、舞台上に登る人物はすべて舞と歌をたしなむ人間でなければならぬ。『三道』にしたがえば、いかに有名人物であっても、ほんらい遊芸風流をたしなまないような人物は能の主役にふさわしくない。いわば能に登場するいつさいの性格は、要するに舞と歌とを最高度に効果あらしめるための手段として求められているのである。したがって「狂気」もまた、この舞や歌をより美しくし得る範囲において受け入れられる。『班女』^{はんじよ}や『花筐』^{はながたかみ}（注6）の狂気はその点において意味を持つが、女に修羅の悪霊が憑いても舞は美しくならないから無意味として否定されるのである。文化史的に舞や歌は人間の「狂気」から生まれたとしても、ここでは芸術的な意味のうえで、その発生的な順序が逆転されていることに注目しなければならぬ。

世阿彌にとつては、舞と歌に興じることがそれ自体、日常性からの脱出であった。だが同じ日常性からの脱出とはいっても、そこには「狂気」と違ってひとつの大きな制約がある。すなわち、舞と歌に興じる人には、「見る者」と「演じる者」との動かし難い区別があるからである。いうまでもなく祭には共通の神があつて、それに触れてエクスタシーを体験する人に見る者と見られる者の区別はない。

だが芸術が生み出すエクスタシーは、あくまでも人間が人間にあたえるものであつて、その間に微妙な主体性の争いが起こつて来る。観客は美しい舞姿に酔つて喜びを感じながら、一方で、ひとりの人間の表現意志によって支配されることを好まない。その美しさがじつは演戯者の自己拡張の表われであつて、自分が他人の繰り糸によつて呪縛されたと感じることを好まない。もし、演戯者の表現意図が少しでも露骨に現われていれば、観客はただちにそこに一種の「嘘」を感じてしまう。しかも、演戯者もしなんの表現意図も持たず、無心にエクスタシーを楽しんでいけば、現われたものは「ひとり合点」の表現に終る。観客は同じ喜びをわけ合うどころか、興ざめしてますます「正気」にもどつてしまふであらう。

したがつて芸術家の表現は、つねにこの「嘘」と「ひとり合点」のあいだにはさまれて苦しまねばならない。世阿彌はこの苦しい宿命をはつきりと知つており、彼の演劇論はいわばこの難題を解くために書かれたといつてもいいすぎではない。そこから、あの「秘すれば花」に始まり「離見の見」^{注7}にいたる大思想が生まれるのだが、それは要するに演戯者がいかにして自己抑制をおこなうかという思索であつた。人間を真に慣習的な日常性から解放するために、まず、恣意的な「狂気」とは反対の方向に進むべきことを見出したのが、世阿彌の発見だつたといえる。

（山崎正和『混沌からの表現』による。一部改変。）

(注) 1 エクスタシー——魂の離脱。人間が神と合体して一つになった忘我の神秘的状態。

2 世阿彌——室町初期の能役者、能作者。能を高雅なものに洗練するとともに、能に芸術論の基礎を与えた。

3～5 『拾玉得花』・『三道』・『風姿花伝』——いずれも、世阿彌が記した能の理論書。

6 『班女』や『花筐』——両者とも狂女が登場する能の演目。世阿彌の作。

7 離見の見——世阿彌の用語。自己(演者)の目を離れて客観的に見ること。

問1 次の文章は本文の内容をまとめたものである。文中の空欄 A ～ E に入れるのに最も適当な語句を、本文中から抜き出して書け。ただし、同

じ記号の空欄には同じ語句が入る。解答は 記述式解答用紙。

演劇や文学は、その根底に一種の「狂気」をはらんでおり、それによって人を A から解放する行為だと言われている。この考え方は、大筋において正しいが、芸術と祭祀の区別が見落とされる危険性もある。この問題を考える場合に、世阿彌が能の中の「狂気」をどのように理解していたかを知ることが、参考になる。世阿彌は、「狂気」をきわめて B 論的にしか見ていなかったと思われる。彼にとつて、狂人を舞台に載せるということは、舞台効果の華やかさを B 的に増すということである。芸術には「見る者」と「演じる者」との区別があり、その間には微妙な主体性の争いが起こる。芸術家の C が露骨に現れていたら、観客はそれを「嘘」だと感じ、D を楽しんでいられるだけであれば、観客は E してしまう。芸術家は、常にこの両者の間で苦しまなければならないのだが、世阿彌は、この宿命をはっきりと知っていた。

問2 傍線部「恣意的な「狂気」とは反対の方向」とあるが、これはどういう方向か。句読点とも30字以内で述べよ。解答は 記述式解答用紙。

第4問【古文】 次の文章は『古事談』の一節である。これを読んで、後の問い（問1～3）に答えよ。

入道殿（注1）、法成寺建立の時、日々御出仕ある頃、白犬を愛して飼はしめ給ひけり。御堂へも毎日に御供す、と云々。

ある日、寺門に入らしめ給ふ時、件の犬、御供に（a）候ひけるが、御前に進みて、走り廻りて吠えければ、しばらく立ち留まらしめ給ひて（b）御覽じけるに、（c）させることもなかりければ、なほ歩み入らしめ給ふに、犬、御直衣の襦（注2）をくはへ引き留め（c）奉りければ、「いかにもやうあるべし」とて、榻（注3）を召して尻をかけしめ給ひて、たちまちに晴明朝臣（注4）を召し遣はし、子細を問はるところ、清明眠り、沈思して申していはく、「君を呪詛し奉る者、厭術（注5）を御路に埋み、越えさせ奉らむと構へて（d）待るなり。今、君の御運（ウ）やんごとなくおはしますにより、御犬吠えあらはす所なり。犬はもとより小神通のものなり」とて、その所を掘らしむる間、土器二つを打ち合はせて、黄色の紙捻（注6）にて十文字にからげたるを堀り出さしむ、と云々。清明申していはく、「この術は極めたる秘事なり。清明のほか、当世定めて人知るなきか。ただし、もし道摩法師（注7）の所為か。その人を知るべし」とて、懐紙を取り出し、鳥の形を彫り、頌（注8）を唱へ投げあげるところ、白鷺となり、南を指して飛び行く。「この鳥の落ち留まるところを以て、厭術の者の住所と知るべし」と申しければ、しもべら、白鳥を守り走り行く間、六条坊門万里小路、河原院の古きしほり戸の内に落ち留まるところを以て、捜し給ふところ、僧一人あり。すなはち、捕らへ取り、由緒を問はるる間、道摩、堀川左府（注9）の語らひを得、術を施す由、すでに以て白状す。しかりといへども罪科に行はれず。本国に追ひ遣はされをはんぬ。ただし、永くかくのごとき呪詛を致すべからざる由、誓状を書かせらる、と云々。

（注） 1 入道殿——藤原道長（九六六～一〇二七）。

2 襦——裾の横布。

3 榻——牛車前方の横棒である轆を置く台。乗り降りの際にも踏み台として用いる。

4 晴明朝臣——安倍晴明（九二二～一〇〇五）。

5 厭術——まじない。

6 紙捻——紙を細長く切つてよってひものようにしたもの。

7 道摩法師——芦屋道満。生没年不詳。

8 頌——唱え言。

9 堀川左府——藤原顕光（九四四～一〇二二）。藤原道長のいとこ。

問1 二重傍線部(a)～(d)の敬語の用法を、次の①～③のうちから一つずつ選べ。解答はマーク式解答用紙、a 〓 9、b 〓 10、c 〓 11、d 〓 12。

- ① 尊敬 ② 謙讓 ③ 丁寧

問2 傍線部(ア)「させることもなかりければ」、(イ)「いかにもやうあるべし」、(ウ)「やんごとなくおはします」の意味として最も適當なものを、次の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答はマーク式解答用紙、ア 〓 13、イ 〓 14、ウ 〓 15。

(ア)「させることもなかりければ」

- ① やらせたいたこともなかったのだ ② そうしているわけにもいかなかったのだ
③ どきそうにもなかったのだ ④ たいしたことなかったのだ
⑤ しなくてははいけないこともなかったのだ

(イ)「いかにもやうあるべし」

- ① きつとわけがあるにちがいない ② 困ったことをするよ
③ 何か伝えたいことがあるのだ ④ どういうつもりなのだろうか
⑤ なんととしても離さないようだな

(ウ)「やんごとなくおはします」

- ① なみなみでなくございます ② 心配でございます
③ それほどもないのです ④ 高貴でいらっしゃる
⑤ この上なくていらっしゃる

問3 次のうち本文の内容に合致しないものを次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答はマーク式解答用紙 16。

- ① 入道殿が飼っていた白犬は、入道殿の身に生じる危難を察知していた。
- ② 入道殿に呪いをかけている者の正体は、晴明にも全く見当がつかなかった。
- ③ 晴明が取り出した懐紙は、白鷺へと姿を変えた。
- ④ 道摩法師は河原院で取り押さえられた。
- ⑤ 入道殿に災いがふりかかることを堀川左府は望んでいた。

2022(令和4)年度 金沢学院大学・金沢学院短期大学
 一般選抜 I 期 (2 日目 / 2022年2月5日実施)
 解答例【マーク式】

国語 【国語総合】			
解答番号		正解	配点
第1問	1	4	2
	2	3	2
	3	3	2
	4	2	2
第2問	5	1	5
	6	3	5
	7	4	5
	8	1	7

国語 【国語総合+古文】			
解答番号		正解	配点
第1問	1	4	2
	2	3	2
	3	3	2
	4	2	2
第2問	5	1	5
	6	3	5
	7	4	5
	8	1	7
第4問	9	2	1
	10	1	1
	11	2	1
	12	3	1
	13	4	4
	14	1	4
	15	5	4
	16	2	4

記述式解答用紙 「国語」

国語総合【解答例】

受験番号	
志望学科	
学科	専攻
氏名	
専攻	

※専攻は「文学科」「教育学科」受験の場合に記入してください。

第1問

④	①
画期的	所詮
⑤	②
依然	典型
	③
	普遍

各配点
4

問5

二	一
相手の顔が見えない	不特定多数の読者

各配点
6

問7

語り手が知らぬ受け手と交渉し、受け手は	協力することを通じて、新しい人間関係に柔	軟に対応していく
---------------------	----------------------	----------

各配点
10

第2問

当たり前のこと、意識して演じなければ	ばならないこと
--------------------	---------

各配点
8

第3問

A	日常性
B	技術
C	表現意図
D	エクスタシー
E	興ざめ

各配点
3

問2

演戯者が、いかにして自己抑制をおこなうか	という方向。
----------------------	--------

各配点
5

